

# 第6回パリ万博

## ～近代生活における芸術と技術～

未来ロボティクス学科 川鍋清志郎

# 第6回パリ万博

## テーマ:近代生活における芸術と技術



- 開催地: フランス, パリ
- 期間: 1937年5月25日～1937年11月25日
- 来場者数: 3104万人
- 内容: 20世紀までのフランス美術を回顧する美術展が開催された

画像参照:

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%91%E3%83%AA%E4%B8%87%E5%9B%BD%E5%8D%9A%E8%A6%A7%E4%BC%9A\\_\(1937%E5%B9%B4\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%91%E3%83%AA%E4%B8%87%E5%9B%BD%E5%8D%9A%E8%A6%A7%E4%BC%9A_(1937%E5%B9%B4))

# パレ・ド・トーキョー

---

現在、パリおよびヨーロッパの先端的な美術の中心となっているパレ・ド・トーキョーは、この万博に合わせ建設された。

名前の「トーキョー」は日本のそれとは何の関係もなく、敷地に接している河岸の名前にちなんで呼ばれるようになった。

画像参照：

<https://madamefigaro.jp/paris/blog/miharufu/enfancey.html>



# フランス開催なのに... ?

当時のフランスの政界は汚職事件などが多く腐敗しており, これに猛抗議した人達が反ファシズムを掲げ1934年に人民戦線を成立した. 人民戦線は万博開催前に解散したが, フランス国内の混乱は収まらず労働者のストライキが相次いだ. そのためフランス館の完成は万博開催後になった.

# 展示物

- ラジオ

生活に密着した新たなテクノロジーとしてラジオに焦点があてられた。放送の仕組みや展示が行われ、放送スタジオ備えたラジオ・パビリオンも建設された。

この万博で発表された新たな技術はラジオ以外に特になかった。各国緊張状態にあったために牽制しあっていたのか??



- ピカソ「ゲルニカ」

当時、内戦が続いていたスペイン。また、1937年スペインの都市、ゲルニカはドイツ空軍によって都市無差別爆撃を受けた。相次ぐ戦争の悲惨さを訴えるために、スペイン館にピカソの「ゲルニカ」が展示された。



参照 : [https://artmuseum.jpn.org/mu\\_gelunica.html](https://artmuseum.jpn.org/mu_gelunica.html)

# 政治と美術

この万博では、当時バチバチだったソビエト連邦館とドイツ館が向き合って建設されていたり、ピカソのゲルニカの展示など政治的な意味合いが強かった。その中でも明白な政治的メッセージを備えた作品が、「ハゲワシを絞めつけるプロメテウス」である。

# ハゲワシを絞めつけるプロメテウス

リトアニア系ユダヤ人彫刻家、ジャック・リプシッツの作品で開催国フランスが出展した。

**鷲をシンボルとするナチスへの明らかな抵抗の意を込めて制作**された。この作品は人目をひくシャンゼリゼにほど近い一角に展示され、作品の政治的メッセージは広く認知された。

人民戦線政府の社会的芸術への志向と反全体主義の思想に合致しており積極的に利用され機能した。

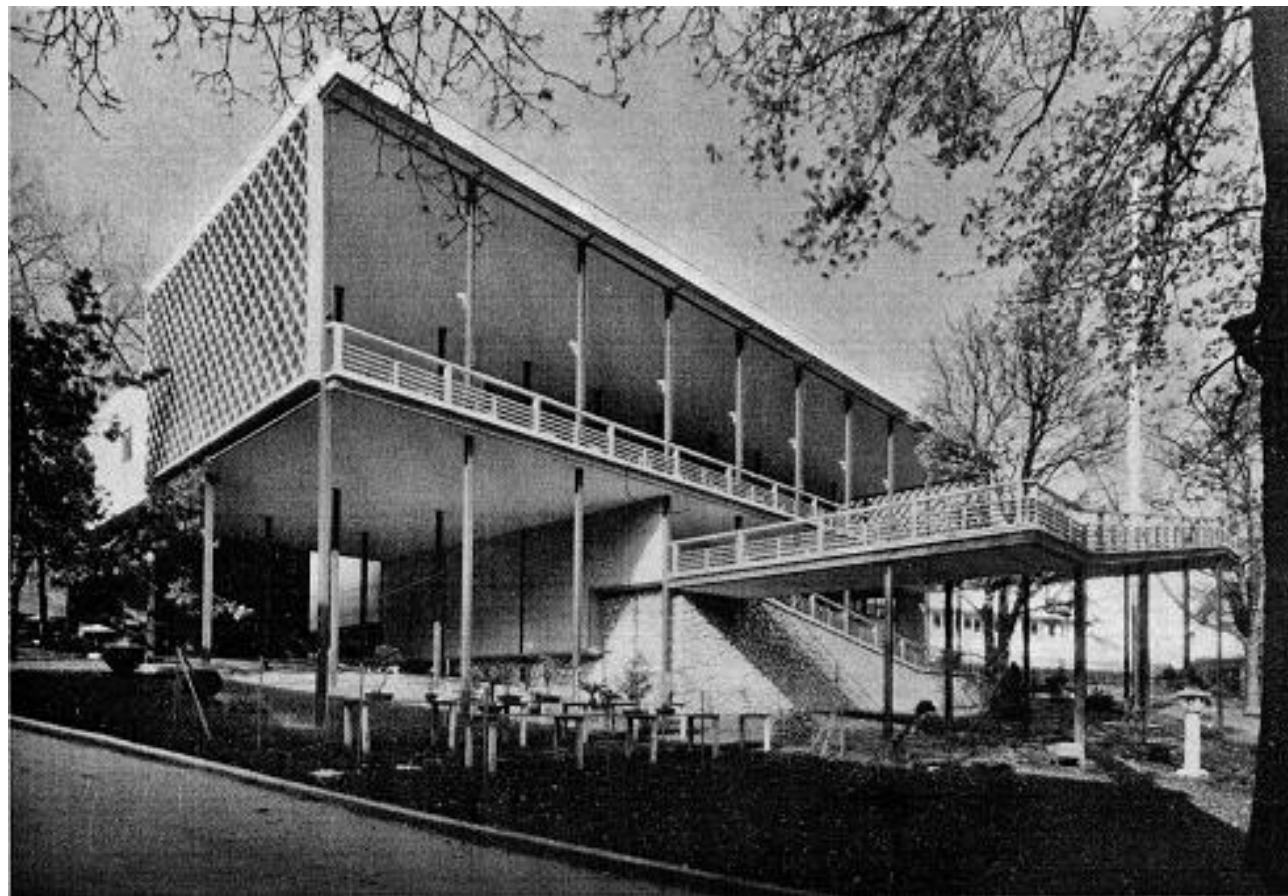
1938年の5月に過激な右派の「ル・マタン」紙による抗議運動を受けて、解体、撤去された。しかし、リプシッツは像をめぐる一連の事件は「効果的だった」と語っている。

すごく気になったが画像が見つからなかった



# 日本館

満州事変や国際連盟脱退など20世紀前半についたマイナスイメージを払拭したい日本は、日本館の建設に伴い、伝統的要素と近代的要素のイメージを取り入れたものにした。それが功を奏し日本館は建築部門のグランプリを受賞した。



画像参照 : <https://suzumodern.exblog.jp/20667863/>

# 日本の展示

日本の展示は以下の4つの部門に分かれていた.

- ・**家庭生活部**(応接室, 婦人室, 喫茶店)
- ・**商店部**(布帛類、食器類、工芸品類)
- ・**科学部**(新発明, 考案等, なるべく実演操作を示す)
- ・**文化宣伝部**(文化宣伝と観光宣伝を含み, 産業, 文化の状況と風光の紹介に努む)

※婦人室は女性専用の部屋. 何に使われていたのか, 何のための部屋なのかは謎.

大賞:24名, 名誉賞:29名, 金賞:35名, 合計88名が受賞した.

中島広吉氏が出店したゴールドグラスが, ガラス工芸の分野で初受賞した.

伝統的要素と近代的要素の両方をうまく取り入れた日本館に対し、日本の展示品には伝統的要素が強く見られた。

展示品を通して外国に伝統的日本を提示するねらいがあり中には過度に伝統的装飾を施した機械類の作品もあった。

日本館は多くの賞賛とグランプリを受賞したのに対し、展示品に対しては国内から批判的意見が多く寄せられた。その差は、日本館は多くの建築家の意見を取り入れて作成されたのに対し、**展示品はパリ万国博覧会協会のみで決定した**ことにある。

こうしたことから国際的マイナスイメージを払拭できず、国際的孤立をさらに深め、第二次世界大戦へとつながっていった。

# 光の祭典

1937年6月14日から12月11日まで開催された音楽と光の祭典である。パビリオンはライトアップされ、花火や噴水が会場を彩った。また音楽は当時フランスで活躍していた18人の音楽家が担当した。

このイベントでは現在のシンセサイザーの祖先ともいわれる電子楽器オンド・マルトノが活躍した。

メシアン作曲のオンドマルトノ6重奏曲「美しい水の祭典」はこのイベントのために作られた。



※画像は当時のものではないです。

参照：<http://adachikanko.net/topics/archives/21647>

# 調べてみて感じたこと・考えたこと

この万博閉館のわずか2年後に第二次世界大戦が勃発しており、この万博は第二次世界大戦前の最後の万博であった。

参加国のほとんどが緊張状態にある中での開催で、敵国を挑発する彫刻や、逆に悲慘な状況を嘆く展示などもあり、そういった点に面白みを感じた一方、万博本来の目的は果たせていなかったように感じた。

万博の目的は公衆の教育であるが、お互いに牽制をしあっている不穏な雰囲気を感じられた。

万博は「楽しい」「Happy」な世界のお祭りというイメージだったが、このような雰囲気のある万博もあることを知り、改めてHappyな万博を今後もみたいなと思った。